

令和3年度・令和4年度「ちばっ子の学び変革」推進事業（検証協力校）研究成果報告書

1 学校紹介

本校は習志野市南東部の埋立地に1969年に創立した小学校である。現在、児童数266人、学級数12クラス。「地域の風がいきかい、学校の風がいきかう学校づくり」を掲げ、地域ボランティアによるお話会、和太鼓演奏等を実施してきた。平成30年度にはキャッチフレーズ「未来へ輝け！笑顔あふれる東小」のもと、創立50周年を迎えた。30年以上の長きにわたり、国語科研究に取り組んできた。

2 研究主題

「豊かな読解力を育てる指導の在り方～文学教材の読みの交流を通して～」

3 研究の概要

(1) 児童の実態と課題

「全国学力・学習状況調査」において、平成31年度までの結果から「書く力」に課題があることがわかった。そこで、本校が行ってきた読みの研究を生かしながら、「書くこと」の言語活動を充実させることによって、思考し、表現する力を育みたいと考え、研究仮説を、「文学的な文章に関する教材の読みを基調として、課題について書いたり交流したりして考えを深め、授業の振り返りの在り方を工夫していけば、『書くこと』を通して読む力を向上させることができるだろう。」と設定した。

(2) 学力向上のための取組

研究主題、研究仮説を踏まえ、本校では『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』に沿い以下のような取組を行ってきた。

○見通しをもたせる単元づくりの工夫

実施日：R3年12月 対象学年：第5学年 教科書教材：「大造じいさんとがん」

次	時数	学習内容
見いだす	1	○物語を読み初発の感想を書く。 ・単元のためである山場やポップについて確認する。 ・確認したことを踏まえて物語の山場についてなぜそこを選んだかの理由も踏まえてノートに書く。 ※この時間の山場の定義については「物語の1番盛り上がる」とし、ノートにまとめる。
	2	○学校司書のブックトークを聞く。 ・様々な椋鳩十の小説について簡単にあらすじの説明を聞く。 ※並行読書として椋鳩十作品を46冊用意し児童が読めるようにする。
自分で取り組む	3 4 5 6	○物語の山場を考えるために、場面ごとに大造じいさんの心情を中心に読み取り、ノートにまとめる。 ・場面ごとに表を活用させながら大造じいさんが取った行動やそのときの心情をまとめる。 ・残雪に対する心情もノートにまとめる。 ・4の場面をまとめた後にこの単元における山場の意味を確かめる。 ※この時点で山場の定義を登場人物の心情の変化が1番大きいところとし、次時へつなげる。
	7	○前時までまとめたことを踏まえて、物語の山場について理由を含めてノートにまとめる。

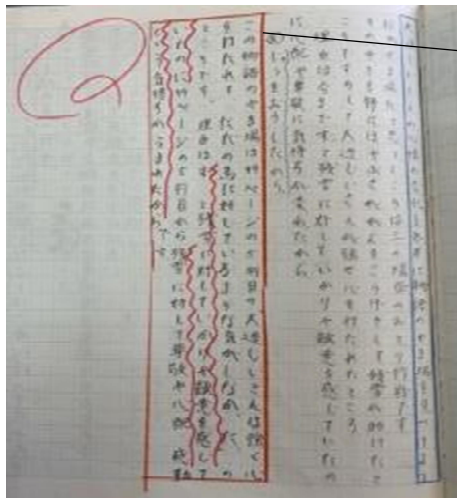
		<ul style="list-style-type: none"> ・山場の意味を確認する。 ・この物語の山場についてそこを選んだ理由も含めてノートにまとめる。
広げ深める		○単元で学習したことを生かして椋鳩十作品5冊の中から紹介する1冊を選び、ポップを作成する。
	9	
まとめあげる		<ul style="list-style-type: none"> ・選んだ作品の山場をノートにまとめる。 ・ノートにまとめたことを活用してポップを作成する。
	10	○自分が作成したポップを持ち寄って作品を紹介する。

○「振り返り」の書かせ方の工夫

① 学習したことを生かしてポップを作成する

実施日：R3年12月 対象学年：第5学年 教科書教材：「大造じいさんとがん」

本単元の言語活動に「椋鳩十作品のポップを作る」を設定した。ポップ作成にあたり、友達との読みの交流を通して山場の見つけ方を学習した。



児童Aが山場とした部分

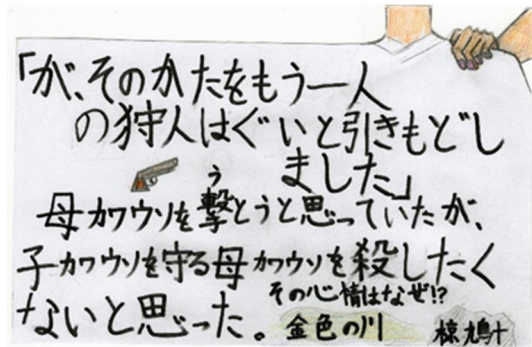
「大造じいさんは強く心を打たれて、ただの鳥に対してしているような気がしなかった。」

〈根拠〉

ずっと残雪に対して怒りや敵意を感じていたのに、
(中略) 尊敬や心配、感動という気持ちが生まれたから。

(写真1：山場を見つけた児童Aのノート)

大造じいさんの心情の変化をよく捉え、根拠となる部分を明記しながらまとめている。



(写真2：児童Bのポップ作品)



(写真3：ポップを紹介し合う様子)

ポップは自分が選んだ作品の山場となる場面の一文を盛り込みながら作成した。学習したことをもとに作成したポップを紹介し発表している様子。

② 場面ごとに学習したことをまとめオリジナルの本を作成する

実施日：R4年1月 対象学年：第2学年 教科書教材：「アレクサンダとぜんまいねずみ」

授業の振り返り活動として場面ごとにアレクサンダになりきって物語を再構成して書いた。



(写真4：児童Cの作品)

場面ごとにアレクサンダの心情を授業で読み取った。書き出しを「ぼくは、」で統一して書き、最終的に一冊の本に仕上げた。授業を通して気付いたこと、想像した登場人物の心情を上手に盛り込みながら作成している。

③ 続きの物語を書く

実施日：R4年7月 対象学年：第3学年 教科書教材：「のらねこ」

続きの物語を書くことを単元のまとめに設定した。

リョウたちが見えなくなったあと、ゆつくりのらねこは屋根からおりました。
 次の日、リョウはどうしてもきのうののらねこのことが気になりました。そして、リョウはきのうはさがさずに行ってしまったので、まだいかなあと思つてキョロキョロ見て回りましたが何もいません。一方のらねこはリョウとのがあつてからけいかい心がなげか少しだけなくなりました。そしてのらねこはだれかの家のにわでごろんとよこになりました。

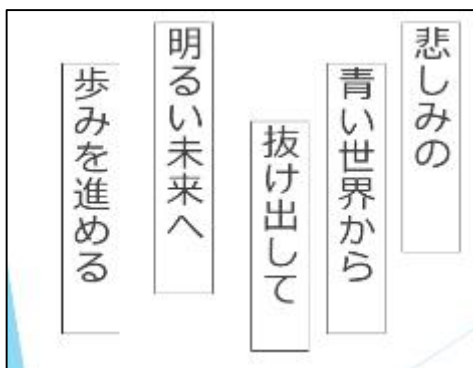
書き出しは全員で「リョウたちが～」に統一した。今まで学習した登場人物の性格や心情を基にして物語を想像しながら書いた。本文を参考にし、のらねこの行動の様子を表す表現を取り入れながら書いている。

(児童Dの作品)

④ 短歌集にまとめる

実施日：R4年7月 対象学年：第6学年 教科書教材：「川とノリオ」

振り返り活動として場面ごとに短歌を作成し、「短歌集」にまとめた。



場面ごとに短歌を作成した。登場人物の心情や色の表現から考えたことを基に作成した。「大造じいさんとがん」において山場を短い言葉にまとめポップを作成する既習内容を生かし、令和4年度は様々な行事を通して感じたことを川柳にまとめる言語活動を行っている。それらを受けて本単元では自分が考えたことを短歌にまとめることに挑戦した。タブレットの活用はすぐに全員で作品を共有するために使用した。

(写真5：児童Eがタブレット上で表現した短歌)

○言語に触れる「多読」の環境整備

R3年 第2学年「さけが大きくなるまで」



本文を学習する前や学習中にさけに関する本を自分で読み、付箋に調べたことを「情報カード」としてまとめ、掲示することでお互いに情報交換ができ、学習へ意欲的に取り組めるようにした。

(写真6：付箋でできあがった『さけのひみつ情報局』)

R3年 第5学年「大造じいさんとがん」



本校の図書室だけでなく市内の図書館からも借りた椋鳩十作品を廊下に置き、いつでも児童が手に取れるようにした。学校司書によるブックトークで紹介した本も入れ、読むきっかけとした。

(写真7：廊下に用意した椋鳩十作品)

(3) 研究加配教員（学習サポーターを含む）の活用

- ・OJTの機能を生かし、研究加配教員自作のプリントや多読へのアイデアを紹介し実践するなど各学年で活用した。
- ・子供の読書推進のための準備や選書等を整えた。
- ・授業研究の計画立案、実践後のまとめ等を校内研究推進委員会を活用して相談しながらすすめた。

4 成果

この2年間行ってきた取組の成果として、全国学力・学習状況調査の「書くこと」「記述式」において、令和3年度、令和4年度ともに本校の平均正答率が全国平均を大きく上回った。その要因として、学習を通して理解したことを自分の言葉でまとめさせるなど、日頃の学習活動の中に振り返り活動を多く取り入れ、児童自らにメタ認知させたことが考えられる。また、本校における無解答率も全国平均と比較して少ないことが明らかとなった。この結果から児童は「書くこと」に対して本研究を行う以前よりも意欲的に取り組むようになったことが考えられる。さらに問題の難易度も影響するが、令和3年度よりも令和4年度の方が本校の平均無解答率と全国の平均無解答率の差が広がっていたが、平均正答率は伸びていた。これは問題の条件に合うような記述の仕方を身に付けてきたと考えられる。

5 今後の課題

- ・読解力の基盤となる書く力を身に付けさせるための学年に応じた単元の学習計画表の作成と内容を充実させていくこと。
- ・『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』に沿った実践を充実させていき、教師間で共有し、豊かな読解力を育むための手立てを充実させていくこと。
- ・言語力をより一層伸ばすために様々な書く活動を充実させ、条件や状況に合った書き方を身に付けるようにしていくこと。